

【研究論文】

和解への想像力

—ウィリアム・スタフォードの詩作と信仰—

島田桂子

研究論文

和解への想像力 ——ウィリアム・スタフォードの詩作と信仰——

島田桂子
Keiko SHIMADA

目次

1. はじめに
2. ウィリアム・スタフォード
の生涯と作品
 - 1) 生涯と宗教的背景
 - 2) 作詞活動と詩の特徴
3. C.O. キャンプでの体験に
よる影響
 - 1) 兵役拒否者としての覚
悟
 - 2) 人々のC.O. への憎し
みと〈疎外〉
 - 3) C.O. キャンプ体験に
よる影響
4. 信仰と詩作との融合
 - 1) 〈疎外〉の克服
 - 2) 和解への想像力
5. おわりに

[Abstract]

Imagination for Reconciliation: The Writing and Faith of William Stafford

William Stafford (1914-1993) is known as a poet who spoke, wrote, and acted for peace. Although he experienced “alienation” as a conscientious objector (CO) during the Second World War, his poetry is filled with tranquility and peacefulness which cannot be seen in the poetry of the so-called confessional poets who also experienced “alienation.” What makes this difference? This paper analyses William Stafford’s idea of pacifism through one of his essays, poems, daily writings, and interviews. I examine how his experience in the CO camps formed Stafford’s writing style and thoughts for peace through his poems on objectors and his autobiographic essay *Down in My Heart*. I then verify that for Stafford, writing poetry and his religious faith are closely connected with each other in his efforts to overcome “alienation,” and they become the driving force to produce imagination leading to his way of reconciliation.

1. はじめに

ウィリアム・スタフォード (William Stafford, 1914-1993) は、第二次大戦中、良心的兵役拒否者として4年間収容所に入れられ、生涯に渡って平和について書き、行動した詩人として知られている。年代的には、いわゆる「告白詩人」と呼ばれるロバート・ローウェル、ジョン・ベリーマン、デルモア・

シュオーツなどと同世代であるが、スタフォードはそれら精神的病を抱えた詩人たちとは違い、その人物と詩は穏やかな平静さに満ちている。彼らと同じように〈疎外〉を体験したスタフォードは、なぜ彼らとはっきりと対照をなすように違うのか。その答えを彼の反戦をテーマにした詩と散文を通して探していきたい。

キーワード：ウィリアム・スタフォード、良心的兵役拒否者、平和主義、アメリカ現代詩
Key words: William Stafford, Conscientious Objector, Pacifism, Modern American Poetry

本論文では、まず大まかにスタフォードの生涯を振り返り、作品の特徴を押さえた上で、良心的兵役拒否者収容所での体験をテーマにした数作の詩と散文『私の心の底で』(*Down in My Heart*, 1948) から、収容所での体験がどのような影響をこの詩人に与えたかを考える。次に、その影響によってどのような詩が生み出されるに至ったかを、彼のインタビューや平和主義思想を示す詩を通して検証し、スタフォードにとって詩作と信仰は〈疎外〉を克服するための両輪となり、和解の道へと目を開く想像力を生み出す力となっていることを論じる。

2. ウィリアム・スタフォードの生涯と作品

1) 生涯と宗教的背景

ウィリアム・スタフォードは1914年1月17日にカンザス州ハッチンソンに誕生し、メソジスト教会に通う両親のもとで育っている。カンザス大学で英文学の学位を取得し、同大学修士課程在学中に第二次世界大戦が勃発する。スタフォードは41年に徴兵されるが、平和主義者として「良心的兵役拒否者(以後C.O.(Conscientious Objectorの略)と記す)」となることを表明する。のちにインタビューで、なぜC.O.となったのかを聞かれ、彼は「私はC.O.になったのではなく、ずっとC.O.であった」⁽¹⁾と答えている。「ずっとC.O.であった」ということ背景には彼の宗教的信念があったことは、彼がC.O.として承認されるための面接でのエピソードに伺える。偶然にも、スタフォードの面接を行った退役軍人の面接官は、彼の日曜学校の教師であった。なぜC.O.になりたいのかという質問にたいして、彼は「私が子どもの頃、あなたは日曜学校で『殺してはならない』と教えていただきました。私はそれを忘れなかった」と答えたという。⁽²⁾ 殺してはならないと教えた日曜学校の教師が退役軍人となっていたことは皮肉であるが、スタフォードは無事にC.O.と

して認められ、1942年から46年までの4年間に、アーカンソーやカリフォルニアなどのC.O.キャンプ(兵役拒否者収容所)へ送られ、山火事の消火活動、植林や道路作りなどの作業、救護活動のためのトレーニングに従事する。

スタフォードは、このC.O.キャンプ時代にドロシー・フランツと結婚したことでプレザレン教会に所属するようになる。妻ドロシーはプレザレン教会の牧師の娘であった。このプレザレン教会は、メノナイト、フレンド派、クウェーカーなどと共に、「歴史的平和教会」と呼ばれ、戦時中は良心的兵役拒否者のためのキャンプを設立し、資金を出して彼らの生活を支えていた。このプレザレン教会との係わりが、スタフォードの平和主義的思想と詩の世界に大きく影響していると考えられる。

戦後は高等学校で教鞭をとり、カンザス大学にて修士号を取得する。C.O.としての体験を綴った修士論文は、彼の初の著書(*Down in My Heart*)として1948年に出版されている。その後1948年から78年まで、オレゴン州ポートランドのルイス&クラーク大学で英文学を教授する。彼は、この大学で教えることを決めた理由の一つとして、大学の事務職員の中に日系人がいたことを挙げている。⁽³⁾戦後、敵国であった日本の出身者が職員として採用されることがまだ難しかった時期に、ルイス&クラーク大学では職員採用における人種的差別や偏見がなかったことを彼は評価したのである。スタフォードは大学で教鞭をとる傍ら多くの詩を書き、1993年8月28日に心臓発作により79歳でその生涯を閉じるまで、精力的に詩作活動に従事し続けた。

2) 作詩活動と詩の特徴

スタフォードは非常に多作な作家であり、79年の生涯で作られた詩は約22,000編にのぼり、そのうち出版された作品は約3,000

編、出版本は67巻ある。

初の詩集『君の町の西』(*West of Your City*)を1960年に発表した後、多くの詩と散文を出版し、その作品は高く評価され、1963年には全米図書館賞を受賞、1970～71年には米国議会図書館詩部門顧問となり、75年にはオレゴン州桂冠詩人に選ばれている。

スタフォードは日常会話に近い口語体を用いて、主に故郷の人々(特に父母)や自然、反戦、宗教をテーマに書いている。題材の多くが自然から取られているのは、スタフォードが中西部のカンザス州で生まれ育ち、後に北西部オレゴン州で生活したことによる、自然との深い接触が大きく影響しているのであるが、彼が描く自然はロマン派詩人による自然のように美化されず、野生の謎を秘めたままの存在として、文明化した人間の生活と微妙に対立しているのである。1962年に発表された詩‘Traveling through the Dark’には、語り手が山林のハイウェイを車で走っているときに子どもを身ごもっている母鹿が倒れているのを発見し、その鹿を谷底に突き落とす決断を迫られる様子が描かれている。そこには文明社会における自然の犠牲と、その社会の一員である作者の苦悩と責任が表現されているのである。日常会話に近い口語体の文体で書かれているために、一見シンプルで理解しやすいように見えるが、表現する言葉が極限まで削ぎ落とされた簡潔性の故に、そこに込められた複雑で神秘的なヴィジョンを理解するのは容易ではない。そこがスタフォードの詩の特徴であり、魅力である。

スタフォードの同世代詩人には、ロバート・ローウェル(Robert Lowell)、ランダル・ジャレル(Randall Jarrell)、ジョン・ベリーマン(John Berryman)、デルモア・シュワーツ(Delmore Schwartz)など才能溢れる詩人たちがいる。彼らは、スタフォードと同様に20世紀の恐ろしい現実、特に第二次大戦の悲惨さを体験している世代であり、その戦時

下での経験を詩にしている。しかし、個人的トラウマや精神問題などの私的体験を扱ういわゆる「告白」詩人(‘confessional’ poets)として分類されるこれらの詩人たちは、いずれも精神的病を患い、自ら命を絶った者もいる。中でもロバート・ローウェルは、スタフォードと同じように良心的兵役拒否者であったが、その戦争に対する攻撃的な詩によって、「火を吐くようなカトリック C.O.」(“a fire-breathing Catholic C.O.”)と呼ばれている。戦時下で良心的兵役拒否という同様の体験をし、共にキリスト教徒であったローウェルとスタフォードは、その詩のスタイルも精神状態も全く異なっていた。スタフォードが彼らと全く違う詩作の道を歩んだ源泉はどこにあるのか、彼の具体的な作品から検証していきたい。

3. CO キャンプでの体験による影響

1) 兵役拒否者としての覚悟

Another World Instead の序文によると、第二次大戦中、アメリカ合衆国では約3,400万人が徴兵に登録し、およそ72,000人が良心的兵役拒否者となることを志願したという。その志願者の三分の一が健康診断で落とされ、任務を免除された。他の三分の一は軍隊で非戦闘員となることを受け入れ、大抵は衛生兵として任務についた。徴兵に全く協力せず、拘引され、投獄された者は約6,000人いた。約12,000人の良心的兵役拒否者が軍隊の非戦闘員となることを受諾せず、CPS(Civilian Public Service)プログラムで民間公共事業の任務に就くことを表明した。スタフォードはその中の一人だった。⁽⁴⁾

「兵役拒否者」と題された詩は、そのような任務につくために彼がCO キャンプで過ごした体験に基づいて書かれた詩である。

Objector

In line at lunch I cross my fork and spoon
to ward off complicity—the ordered life
our leaders have offered us. Thin as a knife,
our chance to live depends on such a sign
while others talk and The Pentagon from the
moon

is bouncing exact commands: “Forget your faith;
be ready for whatever it takes to win: we face
annihilation unless all citizens get in line.”

I bow and cross my fork and spoon: somewhere
other citizens more fearfully bow
in a place terrorized by their kind of oppressive
state.

Our signs both mean, “You hostages over there
will never be slaughtered by my act.” Our vows
cross: never to kill and call it fate.

兵役拒否者

昼食で一列に並び、私は自分のフォークとナイフを交差させる

共謀—すなわち我々の指導者たちがさし出す
規定された生活を回避するために。我々が生き

られる望みは紙一重で、
そのようなしるしに掛かっている

他の人々が話をしたり、米国国防総省が月から

厳格な命令を「信仰を忘れよ、
勝つためには何でもする覚悟でいよ、市民皆が
足並みを揃えなければ、全滅に直面することになる」

と反射している間に。

私は頭を垂れ、フォークとナイフを交差させる。
どこか国家の圧制によって恐怖に陥っている所
では
市民たちはもっと脅えて頭を垂れているだろう。

我々のしるしが意味していることは、「そちら側のあなた方人質は私の所業で虐殺されることはけっしてない」ということだ。我々の誓いが交差する。それは、決して殺さない、そしてそれを運命とは呼ばないということだ。

スタフォードにとって、食事時にフォークとナイフを交差させて十字を作ることは、「信仰を忘れなさい」と圧力を掛ける国家の軍事的統制に対する静かな抵抗であり、本当に服従すべき神への祈りであったに違いない。また、スタフォードは強い圧政によって自分たちより苦しみ、恐怖に怯えている敵国（ナチス政権下のドイツや軍事政権下の日本）の市民に心を寄せている。戦時下で「決して殺さない」という誓いを立てることには自己犠牲を伴う危険性がある。しかし彼は、現状を「運命」と片付けて責任を回避することを断固拒否する。この静かな覚悟に、読者はスタフォードの平和主義の信念の強さを思い知る。そして、本当に「生きる」とはどのようなことなのかという問いを突きつけられる詩である。

2) 人々の C.O. への憎しみと〈疎外〉

収容所へ送り込まれ、非軍事的な作業を行っていた C.O. たちは、国内でしばしば「憶病者」、「売国奴」と蔑まれた。スタフォード自身も C.O. を憎む人々に危うく殺されそうになった体験が『私の心の底で』の「マックニールでの暴徒事件」という最初のエピソードに描かれている。ある日曜の午後、スタフォード自身と思われる‘私’と C.O. 仲間であるボブとジョージの三人が街に散歩に出かけ、‘私’はホイットマンの詩を読み、ボブは画板を持って絵を描き、ジョージは詩を書いていた。そこへ街人たちがやってきて、彼らが C.O. であることに気付くと彼らに色々と言癖をつけ始める。彼らを取り巻く人々の数は段々と膨れ上がり、やがてボブの画板は

取り上げられ、「その板はやつらの頭で叩き割ってやるべきだ」と誰かが提案し、彼らを痛めつける構想を膨らませては、「吊るし首にする」ことを言いだす者もあらわれる。ジョージの詩は韻を踏んでいなかったために何か敵への情報ではないかと疑われたが、たまたま‘私’が読んでいたホイットマンの詩が危機から救った——「もしウォルト・ホイットマンの詩がもっと韻を踏んだものであったなら、私たちはアーカンソー州のリンチ事件死亡者欄に記録されていたかもしれない」(DIMH, 15)とスタフォードは振り返っている。

また、同じく『私の心の底で』の「アナバム・クリークでの戦い」という章では、共に働く公務員たちのC.O.に対する激しい嫌悪感が表現されている。

初めは林野局の職員たちが仲間内で兵役拒否者に対する悪口を言っているのを私たちの数人がたまたま耳にするという具合だった。そして私も実際に、ある男が—のちに彼は私たちの友人となったのであるが—森林管理署でこう話しているのを聞いた—「俺が監督だったらなあ。やつらを並べてダダダダダッとやってやるんだが」とマシンガンの音を真似た。⁽⁵⁾

(DIMH, 28)

「悪の枢軸」と戦う‘Good War’すなわち「正義の戦争」とみなされていた戦いに参戦しないという選択をしたC.O.に対するアメリカ国民の憎しみはかなり大きいものであったことが分かる。しかし、スタフォードをはじめとするC.O.たちが自国民との距離を更に強く感じるのは、戦争が終わってからであった。街に出かけていた‘私’とデルとジョージは、戦争が終わったというニュースを聞く。紙吹雪が舞い、人々は浮かれ騒いでいるが、この三人は喜んでいない。「戦いの終わり」という章に描かれているC.O.たちの心境は次の

ようなものであった。

「やっぱり、撃ち合いが終わったんだから、それを喝采する価値はあるんじゃないかな」とデルは主張した。

ジョージは肩をすぼめて、行きかう車を眺めていた。「原爆の祝いに参加することなんてできるか？」

私たちはみな再び黙ってしまった。そして群衆の流れに続いて通りを歩いた。…私たちは立ち止まり、戦争の勝利者たちを見ていた。それは彼らの戦争だった。彼らが勝ったのだ。

(DIMH, 81, 中略は筆者による)

しかし今私たちは、戦争に勝利した歓喜に湧きかえっている人々の間で、異邦人のように佇んでいた。

(DIMH, 84, 下線は筆者による)

この章の中で、ジョージは「戦争そのものが負け戦だ」という発言をしている。戦争に勝者はいないというのがスタフォードの考えである。C.O.たちは戦後さらに半年間、収容所で暮らさなければならなかった。戦争中、国民は一般市民と軍人とに分けられ、C.O.たちは軍人ではなく、一見「一般市民」のようではあるが、「一般市民」のような自由はなく、ある種の強制移住労働者として取り扱われていた。戦争中はその状況を甘んじて受け入れていた彼らだが、戦後もその状況が続くことに対してデルは「我々はいったい何者なのか」と問う。彼らはその間について考えながら、「これまで以上によそ者となって」、「収容所という我々の島」へ帰っていく(DIMH, 84)。

勝利に湧きかえる国民の姿と、戦後も収監され続けるという現実によって、C.O.たちはさらにアメリカ国民との隔たり感じ、一層の疎外感に襲われている。この疎外感についてスタフォードはのちにインタビューで次のように語っている。

「1940年代頃には、私は誰よりも疎外されていたように思います。なぜなら私は良心的非戦者でしたから。これは一種の疎外です。政府が私にやれと命じたことをどうしてもやりたくなかったのです。だから収容所に4年間いたのです。」

そこから出てきた時、国のやることを何でも妨害しようと思っていたわけじゃないことに気がつきました。私は疎外されたくはなかったのです。しかしどうしても仕方がない時には、疎外されざるを得ない——そんな感じでした。今では多くの詩人たちや作家たちが疎外を自分の生き方にしようとしているように思われます。」

(矢口, 236)

スタフォードにとって〈疎外〉は自分の信念を貫くために仕方なく受け入れていた状況であって、自ら取り入れていたわけではないことが強調されている。ここで言及されている「疎外を自分の生き方にしようとしている」作家とは、ロバート・ローウェルに代表される「告白詩人」を指していると思われる。自らを隔離と孤独へ追い込んでいる詩人たちは一線を画していることをスタフォード自身が明言しているのである。

3) C.O. キャンプでの影響

では、そのような疎外感をスタフォードに与えたC.O. キャンプでの体験は、詩人にどのような影響を与えたのだろうか。スタフォードは収容所での体験が自分にもたらした影響について以下のように述べている。

“--- I've come to feel that probably inwardly I was very much influenced by those four years. The habit of getting up early and writing every day, the sort of—strange to say this—fortress mentality and of being a part of a little group that's apart from society. The automatic assumption that one didn't have

to conform: in fact conformity was a danger sign. I fought against that.”

“It became a habit of mind that encouraged me or strengthened me to be more rigorously independent of any kind of pressure from people—even people near me.”

(Interview by TTTD Productions, 1989)

スタフォードは4年間の収容所生活で二つの習慣が身についたことを述べている。一つは、夜明け前に起床し、毎朝詩を書くという習慣であり、もう一つは、社会から離れた小さなグループの一員となるという習慣である。彼にとって書く習慣は外界（政府、社会、周りの人々）からの圧力に対して何とか持ちこたえるために必要なことであり、「心の要塞」であった。また、小さなグループの一員となる習慣は、自分が社会の一員でありたいけれども、必要なときには大勢から離れることもできるという強さを与えた。この心の習慣は、スタフォードに周りの人々からのどんな圧力からも、より厳格に独立できるよう勇気づけ、元気づけたという。この二つの習慣—毎日書く習慣と大勢に順応しない心の習慣は、その後の彼の詩作に反映されていく。彼は、自分の詩作には「一種の冷たさ」(a kind of coldness)があると語っているが、その「冷たさ」とは、周りに流されずに物事を決断する冷静さとその姿勢をはっきりと示す厳格さの表れであろう。

次に取り上げる二編の反戦の詩は、そのようなスタフォードの厳しさが表れている詩である。

Entering History

Remember the line in the sand?

You were there, on the telly, part of

the military. You didn't want to
give it but they took your money
for those lethal tanks and the bombs.

Minorities, they don't have a country
even if they vote: "Thanks, anyway,"
the majority says, and you are left there
staring at the sand and the line they drew,
calling it a challenge, calling it "ours."

Where was your money when the tanks
grumbled past? Which bombs did you buy
for the death rain that fell? Which year's
taxes put that fire to the town
where the screaming began?

歴史に参加すること

砂原に引かれた境界線を覚えているか。
あなたはそこで、テレビに映っていた、軍隊の
一部として。あなたは金を出したくはなかったが、
あの死をもたらず戦車や爆弾のために
政府は、あなたの金を取った。

少数派の人々は、たとえ投票しても、
自分たちの国はない。「とにかく、ありがとう」
と
大多数の人々は言い、あなたはそこに残り残さ
れて
砂原と彼らがそこに引いた境界線をじっと見つ
める。
彼らはその線を挑戦と呼び、「我々のもの」と呼ぶ。

戦車が轟音を響かせて進んで行ったとき
あなたの金はどこに行ったのだろうか。 死の
雨を降らせるためにあなたはどの爆弾を買った
のか。 いま悲鳴が聞こえ始めた町に砲弾を撃
ち込んだのは
どの年の税金なのか。

この詩は、戦争を行っている国では軍隊だけ
でなく、国民すべてが戦争に参加させられて
いるということを厳しく語っている。国民は
テレビを見ている傍観者では済まされず、爆
弾を落とした当事者としての責任が問われ
る。そして、それは歴史に刻まれ、国民ひとり
ひとりがその責任を負っていかなければなら
ない。この詩の言わんとすることをよく考
えてみれば、戦争の責任は、直接的に戦争を
行っている国ばかりではなく、同盟国として
資金や武器を提供している国とその国民にも
責任が向けられていることが分かる。ここで
は、戦争は敵と味方とを分ける境界線を引く
こととして表現されている。

On Attending a Militaristic Church Service

And there I sat on my swami
holding my nose in the pews,
under the nozzle of preaching
to be washed in the blood of the news.

軍国主義的な教会の礼拝に出席して

そこで私は尊師を尻に敷いて
鼻をつまんで教会の座席に座った、
説教の噴き出し口の下で
戦争報道の血で洗われるのに備えて。

この詩は終戦直後の1945年9月に書かれたも
ので、スタフォードの死後2008年に出版さ
れた *Another World Instead* に収められた。ス
タフォードは、戦争を正当化する教会にたい
して非常に手厳しい。「軍国主義的な教会の
礼拝に出席して」には、流血や暴力を助長す
るような説教にたいする辛辣な皮肉と風刺

が込められている。スタフォードの詩はシンプルであるが、翻訳するのは非常に難しく、この詩にも解釈が難しい部分があり、*Another World Instead* の編集者であるフレッド・マーチャント氏に助言をいただいた。‘my swami’「尊師」という言葉は、まやかしの宗教に対する痛烈な風刺を表現する際にスタフォードが注意深く採用した言葉であり、そこには彼のユーモアも読み取れる。当時のキリスト教会の多くが、アメリカが参戦した第二次大戦を擁護し、礼拝の説教でも戦争の正当性を語り、勇ましく戦う兵士たちのために祈りが捧げられた。スタフォードは、このような教会がキリストの血ではなく、戦争という血で会衆を贖おうとしていることをユーモラスに描くことで、自己欺瞞的な教会を痛烈に批判している。しかも、pews（教会座席）と news（戦争報道）が韻を踏み、そのリズムカルな調子が皮肉さを一層引き立てている。戦争の勝利がクローズアップされ、キリストの自己犠牲による勝利を語らない説教は尻に敷かれるべきだと言っているようだ。

4. 信仰と詩作との融合

1) 〈疎外〉の克服

スタフォードは4年間の収容所生活によって、大きな〈疎外〉を経験したが、その経験を通して彼は詩人としても市民としても力を得ていったことを見てきた。しかし、この〈疎外感〉という大きな精神的ダメージを癒したものは何だったのだろうか。

スタフォードは〈疎外感〉に打ち勝つ方法として、まず自然と交わることを挙げている。自然の中で過ごすことによって、精神的痛手を癒すことができたと言っている。⁽⁶⁾ もう一つは宗教的態度であるという。彼はインタビューで次のように述べている。

「それにもう一つは物事に対して一種の目的を持った宗教的態度だと信じます。理解すること

は許すことです。私にとって知性的であるということは、極端な疎外に打ち負かされないこと、ということにもなります。単に反逆するだけはいけないのです。理解をしなければなりません。」 (矢口, 238)

彼にとって宗教的態度とは、「理解すること」と「許すこと」であり、それが〈疎外〉に打ち負かされない方法であると語っている。スタフォードにとって〈疎外〉は外界からの圧力によって強いられたものであったが、理解し、許すことによってその〈疎外〉から克服されたというのである。

『アメリカ現代詩の一面』によると、「告白詩」とは疎外感から生まれたものであり、無くなってしまった自我に代わって話すものであるから、スタフォードの詩は「告白詩」にはなりえないと指摘されている(矢口238)。また、同書には、スタフォードが「私の持っている衝動は告白から逃れることだ」(246)と語ったことも記載されている。すると、スタフォードにとって「告白から逃れること」とは、〈疎外感〉を克服することだと換言できるだろう。彼の生き方と詩作は、「告白詩人」たちとは向かう方向性が逆だったのである。

2) 和解への想像力

スタフォードは、敵対するものを「理解」し「許すこと」から、更に「助ける」ことに触れている。

“You don’t overwhelm the opposition, you don’t wipe them out; you redeem them, you save them. ----

but you’re also ready, if necessary, to oppose them, but oppose them the way Martin Luther King did, the way Gandhi did. Those are our heroes. Actually, I guess this is a religious position. It’s a Quaker, Mennonite, Brethren, Buddha position.”

(Interview, Kansas Quarterly, 1993)

彼は自分と敵対するものや反対勢力を打ち負かすのではなく、その欠点を補い、助けることが「宗教的態度」であり、それがクウェーカーやメソナイト、プレザレン教会、仏陀の態度であるという。見習うべき人物としてガンディーとキング牧師の名を挙げ、必要なときには対立することも必要であるが、それは彼らが行ったような非暴力主義の態度で行うべきだと主張する。このスタフォードの平和主義思想は、兵役を拒否したこと自体に表れているだけでなく、たとえ周囲の多くの人々がC.O.に対して嫌悪や敵意を示すときでも、彼らとの和解や一致のために働き、「証言すること」の重要性を信じていたことに強く表れている。互いの対話を通じて敵対者との理解を構築していくC.O.たちの姿は、『私の心の底で』に丁寧に描かれているが、「我々は橋を架けた」(“We Built a Bridge”)という章のタイトルに和解の可能性と希望が象徴的に表現されている。

スタフォードの平和主義は、攻撃的な「反戦」運動や活動を越えた「和解の精神」といえるものである。それは、他の人々が分裂を見るところに繋がりを見出そうとする、彼の生涯にわたる習慣が作り上げたものである。「和解」のために必要なのは、相手に対する想像力であり、戦争は詩人スタフォードにとって、想像力の欠如の表象である。

For the Unknown Enemy

This monument is for the unknown
good in our enemies. Like a picture
their life began to appear: they
gathered at home in the evening
and sang. Above their fields they saw
a new sky. A holiday came

and they carried the baby to the park
for a party. Sunlight surrounded them.

Here we glimpse what our minds long turned
away from. The great mutual
blindness darkened that sunlight in the park,
and the sky that was new, and the holidays.
This monument says that one afternoon
we stood here letting a part of our minds
escape. They came back, but different.
Enemy: one day we glimpsed your life.

This monument is for you.

知られざる敵のために

この記念碑は、我々の敵の知られざる
善のためのものだ。絵のように
彼らの生活が見え始めた。彼らは
夕方には、家に集まり、
歌を歌った。田畑の上には
新しい空が見えた。休日があると
パーティーのために赤ん坊を公園に
連れて行った。日光が彼らを包み込んだ。

ここで我々は、心が長いこと目を背けてきたもの
のを
垣間見る。互いの大きな
盲目のために、公園のあの日光や、
新しかった空や休日が暗くなったのだ。
この記念碑は、ある日の午後
我々がここに立ち、我々の心の一部が消えたこと
を
表している。それは戻ってきたが、違ったもの
となっていた。
敵よ、ある日、我々はあなたがたの生活を垣間
見たのだ。

この記念碑は、あなたがたのためのものだ。

世界の人々を忠実な市民か、あるいは敵かのどちらかとして見ることは悲劇を生む。「知られざる敵のために」では、私たちが偏狭な愛国心に陥らないためには、世界の人々を自分と同じ個人、親、隣人、あるいは友人として見る想像力、包括的な視野で世界を見ることが必要であることが表現されている。スタフォードの詩には、虐げられている人、悲しんでいる人に寄り添おうとする気持ちが溢れている。たとえそれが「敵」であっても、変わることはない。彼は「敵のうちにある知られざる善」を想像し続けた詩人であった。

最後に「広島」をテーマにした詩を二編取り上げる。

The Sound: Summer, 1945

Not a loud sound, the buzz of the rattlesnake.
But urgent. Making the heart pound a loud
drum.

Somewhere in dead weeds by a dry lake
On cracked earth flat in the sun.

The living thing left raises the fanged head,
Tormented and nagged by the drouth,
And stares past a planet that's dead,
With anger and death in his mouth.

音——1945年、夏

大きな音ではない、低いガラガラ蛇のたてる音。
しかし切迫した音。心臓が激しくドラムをたたく。
裂けた大地の上で干上がった湖の脇のどこか
枯れた雑草の中で日に照らされてベシヤンこに
なっている。

干ばつに苦しめられ、悩まされながら、

生き残ったその生物は牙のある頭をもたげ、
死んだ惑星をじっとにらみつけて通り過ぎる、
怒りと死を口にして。

スタフォードが CPS キャンプに収容されていた頃の詩には、世界大戦の恐ろしい暴力にたいする強い嫌悪と批判が表現されている。この詩は、そのような詩の一つであり、ちょうど長崎と広島の前爆投下の中間にあたる日、1945年8月8日に書かれた。この頃、スタフォードはイリノイ州のプレザレン CPS キャンプで教育プログラムに携わり、もう山での作業などは行っていなかった。おそらく、原爆の煙が蛇のように爆心地から立ち上る写真を新聞で見っていたことだろう。スタフォードはこの「キノコ雲」を、全惑星を脅かす悪の体現として捉えていたに違いない。

6 August, Hiroshima Day November

From the sky in the form of snow
comes the great forgiveness.
Rain grown soft, the flaks descend
and rest; they nestle close, each one
arrived, welcomed and then at home.

If the sky lets go some day and I'm
requested for such volunteering
toward so clean a message, I'll come.
The world goes on and while friends touch
down
beside me, I too will come.

十一月（八月六日、広島の日）

空から雪となって
大いなる赦しがやって来る。
雨はやわらかくなり、雪片が降り、

そして休む。それらはびったり寄り添い、ひとつひとつが
到着すると、迎えられ、そしてくつろぐ。

もしいつか空が私を手放すなら、そして
とても清いメッセージを語るように
求められるなら、私は行くだろう。
世界は動き続ける。仲間たちが私のそばに
寄り添う限り、私も行くだろう。

「空から雪となって / 大いなる赦しがやって来る」で始まるこの詩は、スタフォードの生涯最後の年となった1993年の8月6日（広島の日）に書かれた詩である。広島原爆投下から48年後のこの広島の詩の「時」は「11月」である。原爆投下時の灼熱地獄と化した世界はここにはない。そこに降る雨は柔らかく、もはや黒い雨はない。しんしんと雪が降る中、静かな祈りのように神聖な和解が世界を包み込んでいるような優しく清らかな詩である。空から降り積もる雪片は互いに寄り添い合い、語り手は「清いメッセージ」を伝える使者としての使命を果たそうとしている。スタフォードはこの詩に、原爆投下という恐ろしい殺戮を行った国の一国民としての責任から、赦しを求めているだけでなく、全世界のあらゆる罪に対する神の赦しの希望を語っているように思える。11月は待降節が始まる月である。広島を思い、赦しを祈る詩の「時」を、世の罪を贖うために生まれ来る救い主を迎えるために罪を懺悔し、心を整える季節に設定したと考えるならば、非常に宗教的な詩である。スタフォードは、この詩を書いた約3週間後に天に召された。

5. おわりに

スタフォードは、第二次大戦という20世紀最大の悲劇を体験し、ロバート・ローウェル、ジョン・ベリーマン、デルモア・シュオーツなどの「告白詩人」と呼ばれる詩人たちと同

様に〈疎外〉を経験したが、彼は〈疎外〉の中に留まることを良しとせず、他者を理解し、赦し、さらに助けることによって〈疎外〉から脱却し、「平和主義」詩人として独特の道を歩んだ。スタフォードにとって、詩作は大勢に抗う独立的精神を強め、信仰は敵の内に隠された、知らせざる善を見る想像力を与えるものであった。この詩作と信仰が両輪となり、和解の道へと導く想像力を生み出す力となっていたことが明らかとなった。スタフォードは、詩の中に自らの心の闇を告白することよりも、和解の目撃者・証人（witness）として清いメッセージを伝えることを選んだのである。

【注】

- (1) *Every War Has Two Losers*, p.131.
- (2) Kim Stafford, 'Introduction' to *Down In My Heart*, p.xi.
- (3) *You Must Revise Your Life*, p.13.
- (4) Fred Marchant, 'Introduction' to *Another World Instead*, p.xvii.
- (5) At first some of the Forest Service men had talked largely, among themselves when some of our men had happened to overhear, about their enmity for CO's; and I myself had overheard one man, later our friend, say in the ranger station, "I wish I was superintendent of that camp; I'd line 'em up and uh-uh-uh-uh"—he made the sound of a machine gun. (*DIMH*, 28)
- (6) 矢口、238頁。

【参考文献】

- 《Works by William Stafford》
Down in My Heart. Brethren Publishing House, 1947; rpt. With an introduction by Kim Stafford. Oregon State University Press, 2006.
Traveling through the Dark. Harper & Row, 1962.
You Must Revise Your Life. University of Michigan Press, 1986.
An Oregon Message. Harper & Row, 1987.
The Darkness Around Us Is Deep. Harper Collins,

1993

The Way It Is: New & Selected Poems. Graywolf Press, 1998.

Every War Has Two Losers: William Stafford on Peace and War. Milkweed Editions, 2003.

Another World Instead: The Early Poems of William Stafford 1937-1947. Graywolf Press, 2008.

《Secondary Sources》

Andrews, Tom, ed. *On William Stafford: The Worth of Local Things*. University of Michigan Press. 1993.

Bunge, Nancy. "People are equal: An interview with William Stafford." *Kansas Quarterly*. 24/25, no. 4/1 (1992/1993): 00-11.

Kitchen, Judith. *Understanding William Stafford*. University of South Carolina Press, 1989.

Gundy, Jeff. "Peaceable Poet: William Stafford's witness." *The Christian Century*. 121, no. 7 (April, 2004): 26-30.

Stafford, Kim. *Early Morning*. Graywolf Press, 2002.

———. "Introduction" to *Down in My Heart*, with an introduction by Kim Stafford. Oregon State University Press, 2006.

———. "Introduction" to *Every War Has Two Losers: William Stafford on Peace and War*, edited with an introduction by Kim Stafford. Milkweed Editions, 2003.

Marchant, Fred. "Introduction" to *Another World Instead: The Early Poems of William Stafford 1937-1947*, edited with an introduction by Fred Marchant. Graywolf Press, 2008.

矢口以文『アメリカ現代詩の一面』旺史社,1983.

